

年齢段階別にみた子どもの住空間認識の発達[†]

第1報 住評価・住要求からみた子どもの住空間認識

中 島 喜 代 子*

The Development of Children's Recognition of Dwelling House When Compared with Their Age (Part 1)

Children's Recognition of Dwelling House Judging from Children's Estimation and Their Demands for Their Dwelling House

Kiyoko NAKAJIMA

The purpose of this study is to grasp the children's recognition and directional intention of dwelling house and home life, and to make it useful materials for their education of housing.

In this paper, the children (primal school children, junior high school students and senior high school students) and their mothers have been inquired of estimation and demands for their house.

The following results were obtained.

1) The primal school children can recognize the space of their house and equipments in their house centering around the familiar space for them.

2) The junior high school students can recognize the regional institution, and children's room and living room by their development of self more than primal school children do.

And they judging their dwelling space realistically and profoundly more than primal school children do.

3) The senior high school students can recognize not only strage space and the room for housekeeping which are not familiar space for children, but also furniture arrangement and room arrangement in a whole house.

At this strage of age, children's recognition of their dwelling space develops by leaps and bounds.

1. 緒 言

本研究は、子どもが居住する住宅や住生活に対する子どもの認知の状態および住空間に対する評価・要求を検討することによって、住宅や住生活に対する子どもの認識や志向が、子どもの年齢段階によってどのような差異を有しているのかを分析し、今後の住教育に役立てることを目的としている。

本研究の特徴は、子どもの年齢段階別に、子どもが居住する住宅に対する評価・要求の側面から子どもの判断可能な範囲や判断の状況をとらえて母親の住評価・住要求と比較検討し、また住宅における生活用品の収納場所や家庭環境全般にわたる実態の認識状況をとらえることにより、子どもの成長に伴って生じる住宅や住生活についての子どもの認識や志向の変化と差異の様相をとらえようとするところにある。

[†] 原稿受理日 昭和62年10月15日

* 三重大学教育学部

発達心理学においては、すでに各年齢段階における思考発達についての特徴がピアジェ等によってとらえられているが、本研究では主に住空間の側面からこれを明らかにしたい。また、研究の方法は発達心理学でいう横断的方法をとるが、これは統計的に平均的な発達傾向をとらえることを目的としているためである。

なお、住空間に対する認知の対象は、広くは社会環境から住宅内部にわたる広範な領域を含むものであるが、本研究では自分が居住する住宅とその周辺環境に対する認知の状況をとらえることがまず必要であると考え、主に認知の対象を住宅内部とその周辺に限定して検討するものである。

本報（第1報）では、子どもが居住する住宅について、まず評価・要求の判断が可能かどうかの側面から子どもの認知の状態を検討し、次に子どもが示した評価・要求が母親の評価・要求との間にどのような差異と関連を有しているかを検討することにより、子どもの認知内容について考察する。

2. 調査方法

調査対象は、居住地域が子どもの住空間認知に与える影響を考慮して、居住地域を同一のものとすることとし、三重県伊勢市内にある小・中・高校を各1校ずつ選択した。各学校に在学する小学校5・6年生、中学2年生、高校2年生の児童・生徒とその母親を対象として、昭和59年7月～9月にかけてアンケート調査を実施した。その結果得られたサンプル数を、表1に示す。

表1. 調査対象数

学年	性別		計 件数 (%)
	男子 件数 (%)	女子 件数 (%)	
小学校 5・6年生	121 (38.5)	132 (38.7)	253 (38.6)
中学校 2年生	73 (23.3)	103 (30.2)	176 (26.9)
高校 2年生	120 (38.2)	106 (31.1)	226 (34.5)
計	314 (100.0)	341 (100.0)	655 (100.0)

調査対象の概要は、表2に示すとうりである。一世帯当たりの家族人数は約5人、住宅の部屋数は6室にピークがあり、約7割が専用住宅、約9

表2. 調査対象の概要

家族人数	全 体 件 数 (%)	小 学 生 件 数 (%)	中 学 生 件 数 (%)	高 校 生 件 数 (%)
2 (人)	2 (0.3)	0 (0.0)	1 (0.6)	1 (0.5)
3	48 (8.1)	11 (4.8)	10 (6.4)	27 (12.8)
4	195 (32.8)	74 (32.6)	62 (39.7)	59 (28.0)
5	198 (33.3)	83 (36.6)	48 (30.8)	67 (31.8)
6	102 (17.2)	37 (16.3)	24 (15.4)	41 (19.4)
7	45 (7.6)	19 (8.4)	10 (6.4)	16 (7.6)
8	4 (0.7)	3 (1.3)	1 (0.6)	0 (0.0)
不明	61 —	26 —	20 —	15 —
計	655 (100.0)	253 (100.0)	176 (100.0)	226 (100.0)

住宅部屋数	全 体 件 数 (%)	小 学 生 件 数 (%)	中 学 生 件 数 (%)	高 校 生 件 数 (%)
3 (室) 以下	57 (9.7)	30 (13.8)	17 (10.4)	10 (4.9)
4	70 (11.9)	32 (14.7)	26 (15.9)	12 (5.9)
5	109 (18.6)	43 (19.8)	38 (23.2)	28 (13.7)
6	126 (21.5)	44 (20.3)	36 (22.0)	46 (22.4)
7	75 (12.8)	23 (10.6)	20 (12.2)	32 (15.6)
8	67 (11.4)	24 (11.1)	17 (10.4)	26 (12.7)
9	33 (5.6)	10 (4.6)	6 (3.7)	17 (8.3)
10以上	49 (8.4)	11 (5.1)	4 (2.4)	34 (16.6)
不明	69 —	36 —	12 —	21 —
計	655 (100.0)	253 (100.0)	176 (100.0)	226 (100.0)

(注) %は不明を除いた数値

割が一戸建および持家に居住している。子どもの年齢段階別にみると、家族人数に差はないが、住宅条件については一戸建比率、持家比率ともに、小・中・高校生の家庭へと順次高くなっており、部屋数でも同様に大きな差がみられる。

3. 調査結果および考察

1) 住評価からみた子どもの空間認識

a. 住評価項目の分類

子どもが居住する住宅とその周辺環境に対する評価について調査に用いた項目を、表3に示す。これは、〈住宅の全体的広さ〉〈各部分空間の広さ〉〈家具関係〉〈自然環境条件〉〈平面プラン〉〈視覚的デザイン〉〈設備空間の機能性〉〈地域施設〉〈住宅の安全性〉〈住宅の全体的評

価〉等の〈項目分類〉によるものである。それらを、さらに〈項目の性格〉の側面と〈空間の広がり〉の側面から、表3に示すように分類した。

b. 子どもの住評価判断

各調査項目について、〈良い〉〈どちらでもない〉〈悪い〉〈わからない〉の категорияに分けて質問した。そのうち、〈わからない〉と答えた者を評価判断ができない者、それ以外に何らかの評価をした者を評価判断が可能なる者と考え、この

表3. 調査に用いた住評価項目の分類

項目分類	項目	項目の性格	空間の広がり
住宅の全体的広さ	1. 部屋の数 2. 住戸面積 (住宅全体の広さ) 〈家全体の広さ〉	空間の実態的側面	住宅全体
各部分空間の広さ	3. 居間の広さ 4. 食事室の広さ 5. 台所の広さ 6. 個室・寝室の広さ〈子ども部屋の広さ〉 7. 押入・納戸・物入れなどの広さ 8. 庭の広さ	空間の実態的側面	家族共用空間 設備空間 私的空間 収納空間 外部空間
家具関係	9. 家具の数量〈家具の数〉 10. 家具の配置〈家具の置き場所〉	空間の機能性に関する側面	住宅全体
自然環境条件	11. 日照・採光・通風〈日あたり, 風とおし〉 12. 周辺の自然環境〈まわりの自然〉	空間の実態的側面	住宅全体 地域空間
平面プラン	13. 住宅全体の間取り〈家の間取り〉 14. L・D・K (居間・食堂・台所) のつながり 15. 個室・寝室の独立性 16. 押入・納戸・物入れなどの位置 17. 台所・風呂・便所の位置	空間の機能性に関する側面	住宅全体 家族共用空間 私的空間 収納空間 設備空間
視覚的デザイン	18. 住宅の外観デザイン〈家を外からみた感じ〉 19. 室内のインテリアデザイン	美的感覚に関する側面	住宅全体
設備空間の機能性	20. 台所・風呂・便所の設備 21. 台所まわりの使いよさ	空間の機能性に関する側面	設備空間
地域施設	22. 公共施設 (学校・病院など) 23. 商業的施設 (スーパー, 映画館など) 24. 交通の便利さ (通勤・通学)	空間の実態的側面	地域空間
住宅の安全性	25. 災害時の安全性 (火事や地震) 26. 防犯性能〈防犯性能 (とじまりなど) 〉	非日常的側面	住宅全体
住宅の全体的評価	27. 住宅の老朽度 (家の古さ) 28. 住宅の財産としての価値	住宅の実態的側面 社会的価値の側面	住宅全体

〈 〉内で示したのは、中・高校生用調査と異なる表現で示した小学生用のもの。

視点から子どもの空間認識の一面についてとらえる。

図1に、調査対象の子ども全体について、各項目に対する評価判断が可能であった者の割合（以後、「住評価判断率」と記す）を示す。各項目に対する「住評価判断率」は、69%～96%の間に分布している。項目間の差異をみると、〈住宅の全体的広さ〉〈各部分空間の広さ〉〈自然環境条件〉などの〈空間の実態的側面〉に関しては、「住評価判断率」が高いが、〈平面プラン〉〈視覚的デザイン〉〈住宅の安全性〉〈住宅の全体的評価〉などの〈空間の機能性に関する側面〉や〈美的感覚に関する側面〉〈非日常的側面〉〈社会的価値の側面〉についての「住評価判断率」は低い。そのうち、後2者は特に低く、80%を下回っており、子どもにとって認識しにくい項目といえる。

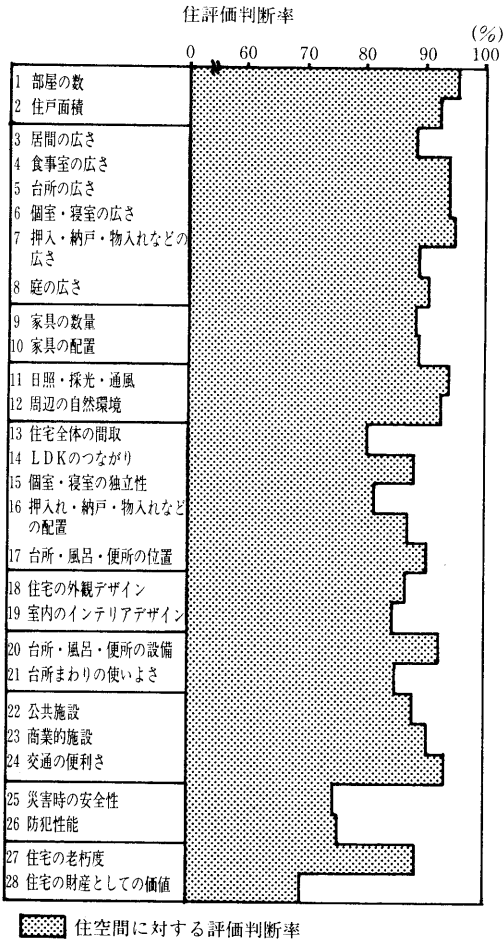


図1. 住空間に対する子どもの評価判断率

次に、年齢段階別・男女別の「住評価判断率」を図2に示し、これを検討する。まず、子どもの年齢段階による差異をみると、〈各部分空間の広さ〉〈自然環境条件〉〈視覚的デザイン〉〈平面プラン〉〈地域施設〉〈住宅の全体的評価〉などの〈空間の実態的側面〉〈空間の機能性に関する側面〉〈美的感覚に関する側面〉について、年齢段階と住評価判断との間に順位相関係数5%水準までの有意性があり、子どもの成長とともに空間認知が広範に発達することが認められる。また、〈空間の広がり〉の側面からも、各部分空間から住宅全体、さらに地域施設にいたるまでの多くの項目で、子どもの成長にともなう空間認知の発達がみられる。

これを、子どもの年齢段階別にみると、〈非日常的側面〉を除いたすべての項目について、高校生段階でもっとも「住評価判断率」が高く、また高校生段階ではじめて「住評価判断率」が上昇する項目が多い。高校生段階では、28項目のうち21項目は90%以上の値を示しているが、〈非日常的側面〉や〈社会的価値の側面〉については70%台にとどまっており、高校生においてもこの側面の理解は困難であることを示している。一方、小・中学生段階では、「住評価判断率」が90%を超える項目は少なく、〈住宅全体の広さ〉〈各部分空間の広さ〉〈自然環境条件〉などの〈住空間の実態的側面〉に限られている。

全体的に、高校生段階からの「住評価判断率」の上昇が顕著であり、中学生段階から上昇する項目は少ない中で、「個室・寝室の広さ」「個室・寝室の独立性」「居間の広さ」「押入・納戸・物入れの広さ」では、中学生段階で上昇している。すなわち、中学生段階で自我が発達することにより、個室と家族共用室との区別が明確になり、住評価の判断に対する認知が発達するものと考えられる。

次に、男女別の「住評価判断率」を検討すると、ほとんどの項目において大きな差はみられないが、小学生段階では「個室・寝室の広さ」「室内のインテリアデザイン」「台所まわりの広さ」などの項目において女子の「住評価判断率」の方が高く、個室や室内装飾、家事作業空間に対する関心と理解は、女子の方が早く発達する傾向が認められる。しかし、「防犯性能」や「住宅の財産としての価値」の項目は、中・高校生段階において男子の「住評価判断率」の方が高く、〈非日常的側面〉や〈社会的価値の側面〉については、成長とともに

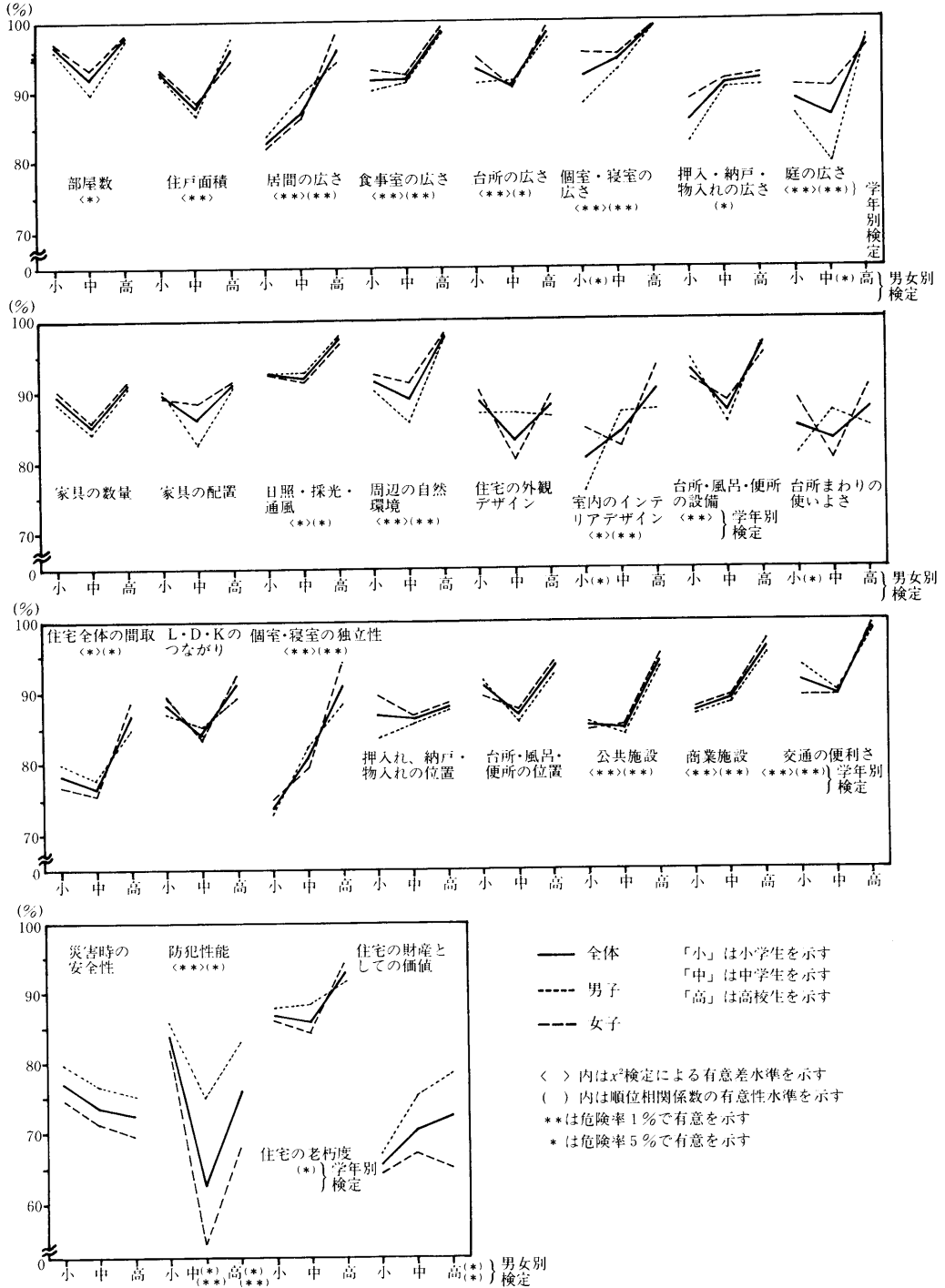


図2. 年齢段階別・男女別 住評価判断率

に男子の関心や理解の方が高くなる傾向があると
いえよう。

c、 母親との比較による子どもの住評価の傾向

子どもが居住する住宅の実態はそれぞれ異なっ
ており、しかも年齢段階によって違いがあるため、
子どもの評価の傾向については母親の評価との関
連性を中心に検討する。

〈良い〉〈どちらでもない〉〈悪い〉のカテゴ
リー別に、子どもの住宅に対する評価の割合を、
図3に示す(〈わからない〉と答えた子どもは除
く)。また、このカテゴリー分類による母親と子
どもの評価の順位相関係数を表4に示す。

大半の項目において、母親の評価の方が悪い傾
向がみられる。その中で、特に収納空間(「押
入・納戸・物入れの広さ」「押入・納戸・物入れ

の位置)および〈空間の機能性に関する側面〉
(「家具の配置」「住宅全体の間取り」「LDKのつ
ながり)」、〈非日常的側面〉についてはその傾向
が顕著であり、母親の関心は強いと考えられる。
しかし、〈地域施設〉の項目については子どもの
評価の方が悪くなっており、〈地域施設〉に対す
る母親の関心は低いといえよう。

次に、母親と子どもの評価の関連をみると、対
象全体では、〈家具関係〉や収納空間、〈非日常
的側面〉の項目についてはやや相関が低い。子ど
もの年齢段階別にみると、大半の項目について、
高校生段階でもっとも相関が高くなっており、こ
の年齢段階で住空間に対する現状認知が母親に近
づき、現実的評価になるといえる。しかし、小学
生段階と中学生段階とを比較すると、〈地域施
設〉項目を除き中学生段階で相関が上昇する項目
はほとんどみられない(表4参照)。

2) 住要求からみた子どもの空間認識

a、 住要求項目の分類

表5に示すように、子どもが居住する住宅に対
する住要求項目を各空間の種類別に、〈空間拡大
要求〉〈家具配置がえ要求〉〈専用空間要求〉
〈設備要求〉に分類し、空間の種類および要求の
種類別に分析を行う。

b、 子どもの住要求判断

表5に示した各項目について、要求が〈ある〉
〈ない〉〈わからない〉のカテゴリー分類で調査
した。そのうち、〈わからない〉と答えたものを
住要求判断ができないものととらえ、〈ある〉も
しくは〈ない〉のいずれかの判断を示したものを
判断可能なものと考え、住評価の場合と同様の方
法によって子どもの空間認識についてとらえる。

図4に、調査対象の子ども全体について、各項
目に対する要求判断が可能であったものの割合
(以後、「住要求判断率」と記す)を示す。「住要
求判断率」は、すべての項目について80%を上
回っているが、そのうち「居間」「客間」「収納空
間」「家事室」についてはやや低く、住宅におけ
る諸空間のうち認知がやや困難な空間であるとい
える。また、要求の種類別にみると、〈空間拡大
要求〉と〈設備要求〉については「住要求判断
率」は高い傾向がみられるが、〈家具配置がえ要
求〉はこれらにくらべて低い。すなわち、要求判
断に際して単に空間の実態だけでなく空間の使い

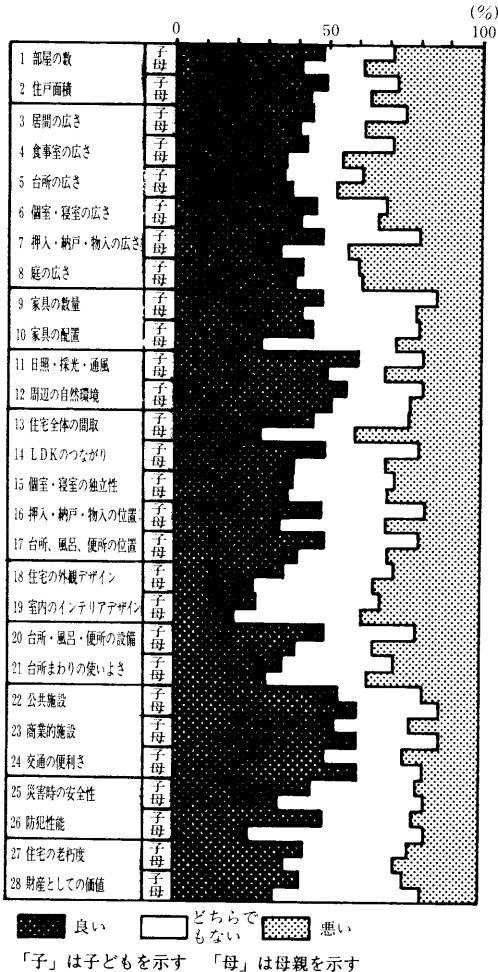


図3. 母親と子どもの住空間に対する評価の傾向

表4. 住空間に対する母親の評価と子どもの評価との関連

**は危険率1%で有意

*は危険率5%で有意

項 目	母親の評価と子どもの評価との関連 (順位相関係数)			
	全 体	小学生	中学生	高校生
1 部屋の数	0.353**	0.303**	0.391**	0.405**
2 住戸面積	0.249**	0.212**	0.175**	0.317**
3 居間の広さ	0.304**	0.301**	0.186**	0.372**
4 食事室の広さ	0.300**	0.245**	0.269**	0.403**
5 台所の広さ	0.282**	0.299**	0.205**	0.324**
6 個室・寝室の広さ	0.248**	0.267**	0.200**	0.231**
7 押入・納戸・押入れなどの広さ	0.203**	0.222**	0.211**	0.208**
8 庭の広さ	0.420**	0.324**	0.430**	0.465**
9 家具の数量	0.088**	0.064	0.053	0.142*
10 家具の配置	0.149**	0.123*	0.096	0.219**
11 日照・採光・通風	0.253**	0.235**	0.286**	0.255**
12 周辺の自然環境	0.232**	0.185**	0.188**	0.198**
13 住宅全体の間取	0.240**	0.242**	0.264**	0.235**
14 LDKのつながり	0.240**	0.291**	0.138*	0.276**
15 個室・寝室の独立性	0.260**	0.264**	0.254**	0.274**
16 押入・納戸・物入れなどの位置	0.168**	0.171**	0.169**	0.216**
17 台所・風呂・便所の位置	0.229**	0.227**	0.216**	0.265**
18 住宅の外観デザイン	0.300**	0.272**	0.364**	0.326**
19 室内のインテリアデザイン	0.224**	0.231**	0.192**	0.278**
20 台所・風呂・便所の設備	0.249**	0.200**	0.310**	0.285**
21 台所まわりの使いよさ	0.292**	0.278**	0.179**	0.417**
22 公共施設	0.260**	0.095*	0.155**	0.327**
23 商業的施設	0.308**	0.049	0.326**	0.337**
24 交通の便利さ	0.313**	0.058	0.364**	0.442**
25 災害時の安全性	0.235**	0.206**	0.264**	0.251**
26 防犯性能	0.128**	0.033	0.151*	0.200**
27 住宅の老朽度	0.371**	0.420**	0.241**	0.430**
28 住宅の財産としての価値	0.275**	0.283**	0.159*	0.367**

方あるいは住生活のしくみの理解についても必要な項目についての認知は、やや困難であるといえる。

次に、年齢段階別・男女別の「住要求判断率」を、図5～8に示す。まず、年齢段階別の傾向についてみると、〈空間拡大要求〉における「子ども部屋」「便所」「収納空間」「玄関」について、また〈家具配置がえ要求〉における「台所・食事室」、〈専用空間要求〉における「便所1ヶ所増設」「書斎・趣味室」「家事室」、〈設備要求〉における「便所」については、子どもの年齢と住要求判断との関連に有意性があり、いずれも高校生

段階で「住要求判断率」が上昇している。すなわち、高校生段階になると、住宅内部の諸空間に対する理解が急速に深まるといえよう。

男女の違いをみると、全体的に小学生段階では女子の「住要求判断率」の方が高い項目が多く、中学生段階では男子の方に高い傾向がみられる。また、空間の種類別にみると、「台所・食事室」では各年齢段階を通じて女子の「住要求判断率」の方が高くなっている。

c. 母親との比較による子どもの住要求の傾向

図9に、母親と子どもの全対象が住要求〈あ

表5. 調査に用いた住要求項目の分類

空間	項 目	空間拡大 要 求	家具配置 がえ要求	専用空間 要 求	設備要求
子ども 部屋	もっと広い方がよい 家具の置き場所をかえたい 自分ひとりだけの子ども部屋がないのでほしい	○	○	○	
居 間	もっと広い方がよい 家具の置き場所をかえてほしい<かえたい> 専用の居間がないのでほしい	○	○	○	
客 間	もっと広い方がよい 家具の置き場をかえてほしい<かえたい> 専用の客間がないのでほしい	○	○	○	
食事室・ 台所	もっと広い方がよい 新しい流し台などを取り入れ使いやすい台所にして ほしい<したい> 調理台・テーブルなどの配置をかえてほしい <かえたい>	○	○		○
風 呂	風呂はもっと広い方がよい 風呂がないのでほしい 風呂の設備（シャワーなど）を整えてほしい <整えたい>	○		○	○
便 所	便所はもっと広い方がよい もう1か所便所を増やしてほしい<増やしたい> 便所の設備（水洗など）を整えてほしい<整えたい>	○		○	○
その他の 空間	押入れなどの収納空間がもっとほしい 書さい、しゅみのための部屋がほしい 家事室がないのでほしい げんかんを広くしてほしい<広くしたい> 庭がないのでほしい 庭をもっと広くしてほしい<広くしたい>	○ ○ ○		○ ○ ○	

< >内は、母親用調査項目の表現
子ども部屋については子どもだけに調査している

り>と答えた割合を示し、表6には母親と子どもの住要求有無についての順位相関係数を示す（各住要求項目について<わからない>と答えたものを除く）。

各要求とも、全体的に母親の要求率の方が高いが、特に「収納空間」と「家事室」においてはその傾向が著しい。また、要求の種類のうち<家具配置がえ要求>についても同様に母親の要求率の方が高い傾向が顕著である。ただし、「庭」と「風呂」については、子どもの要求率の方が高い傾向がみられる。

次に、母親と子どもの要求についての関連性をみると、「台所・食事室」については関連性が強く、母親と子どもの要求は一致する傾向がみられ

るが、「収納空間」についての関連は弱い。要求の種類別にみると、<設備要求>における関連は強いが、<家具配置がえ要求>の関連は弱くなっている。さらに、「台所・食事室」「居間」「客間」の居室について比較すると、各居室ともに<家具配置がえ要求>よりも<空間拡大要求>の関連の方が強い。すなわち、子どもにとって単に設備の実態や空間の広さをとらえるよりも、空間の使い方や住生活のしくみについての理解を必要とする家具配置についてとらえることは、困難であることを示しているといえる。

次に、子どもの年齢段階別に、母親と子どもの住要求率を図10～13に示し、母親と子どもの住要求の関連と合わせて、子どもの成長とともに住要

年齢段階別にみた子どもの住空間認識の発達 第1報

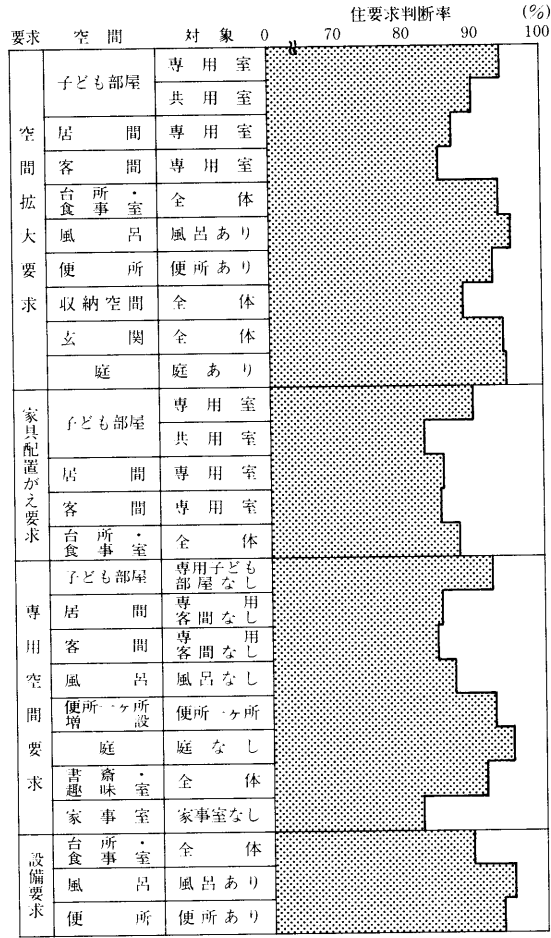


図4. 住宅に対する子どもの要求判断率

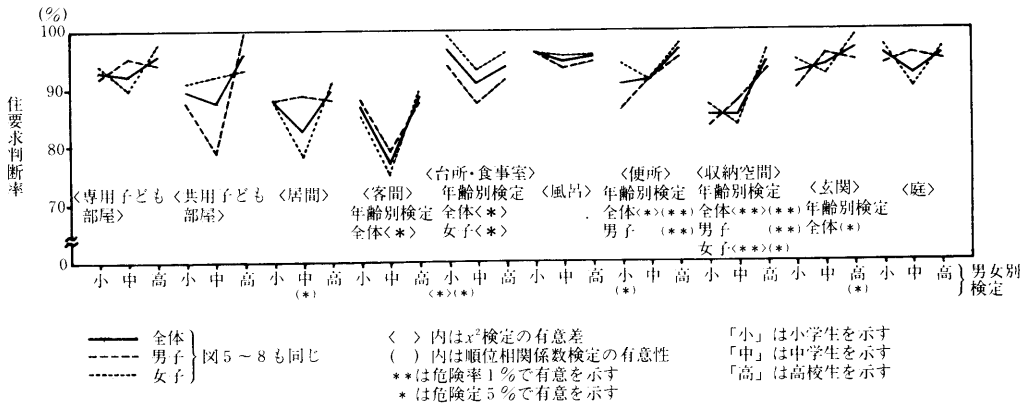
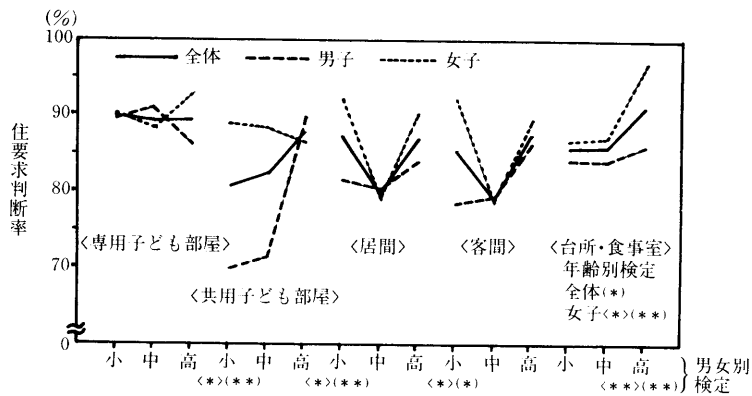
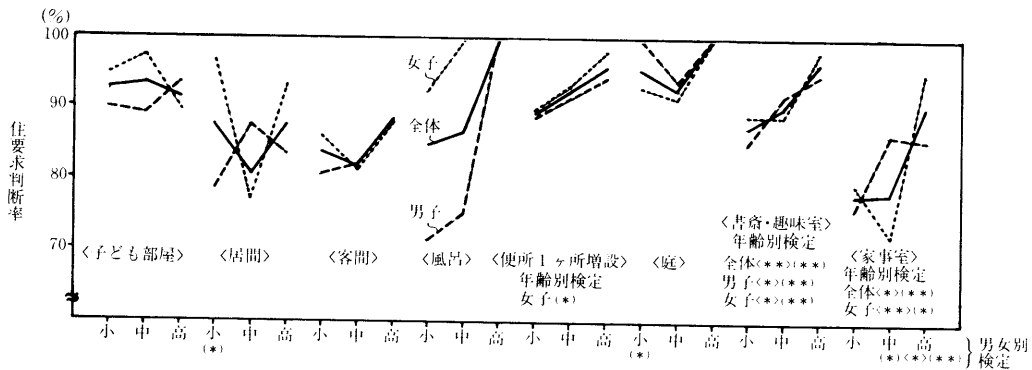


図5. <空間拡大要求>についての住要求判断率



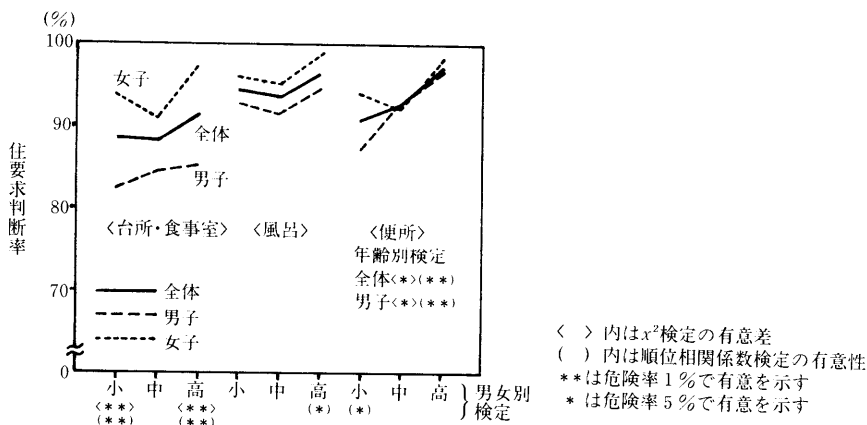
< > 内は χ^2 検定の有意差
 () 内は順位相関係数検定の有意性
 **は危険率1%で有意を示す
 *は危険率5%で有意を示す

図6. <家具配置がえ要求>についての住要求判断率



< > 内は χ^2 検定の有意差
 () 内は順位相関係数検定の有意性
 **は危険率1%で有意を示す
 *は危険率5%で有意を示す

図7. <専用空間要求>についての住要求判断率



< > 内は χ^2 検定の有意差
 () 内は順位相関係数検定の有意性
 **は危険率1%で有意を示す
 *は危険率5%で有意を示す

図8. <設備要求>についての住要求判断率

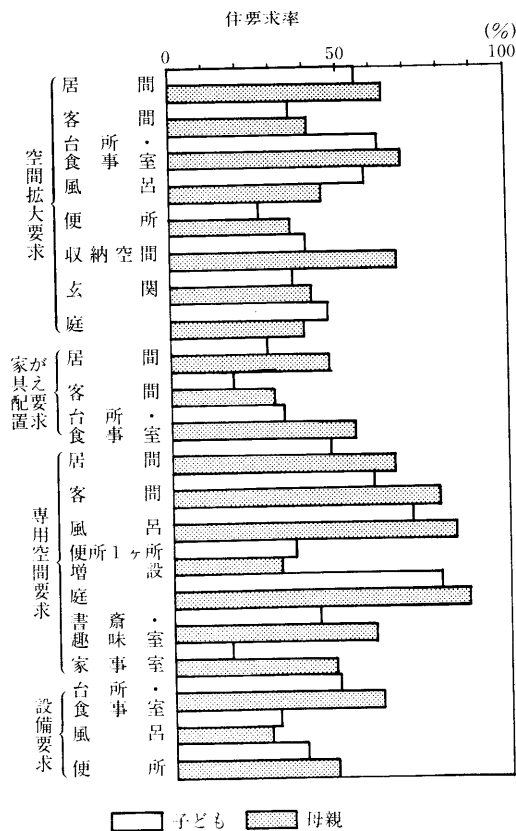


図9. 母親と子どもの住空間に対する要求の傾向

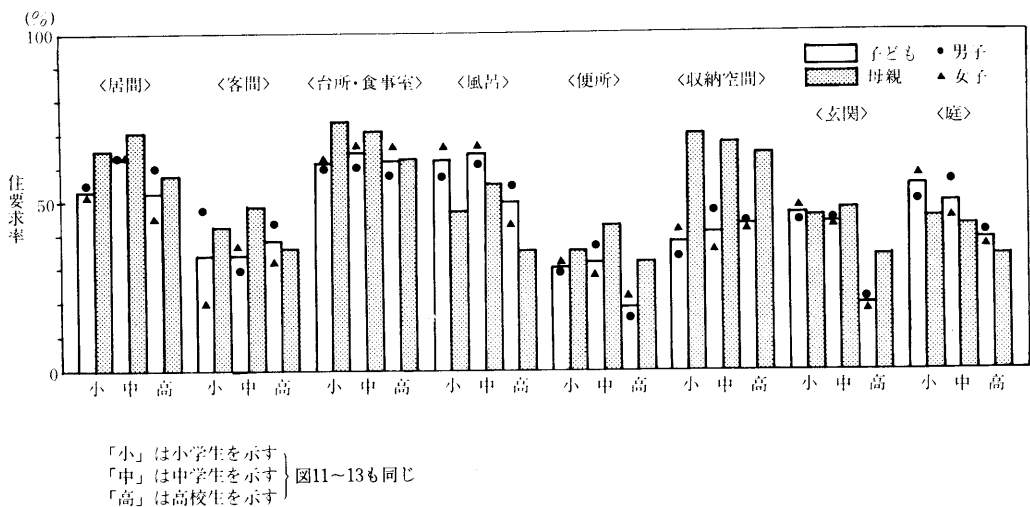
求の傾向がどのように変化するかについて検討する。

各要求の種類別にみると、まず<空間拡大要求>では、母親と子どもの要求率の差が著しくみられた「収納空間」は、子どもの成長とともにその差は減少しており、「居間」「客間」「台所・食事室」などの居室も同様の傾向がみられる。母親と子どもの要求の関連性も、1~2の例外を除いて中学生あるいは高校生段階で強くなっている(図10、表6参照)。

<家具配置がえ要求>では、各年齢段階ともに母親と子どもの要求率の差は大きいですが、母親と子どもの要求の関連をみると、高校生段階で関連が強くなり母親の志向に近づく傾向がみられる(図11、表6参照)。

<専用空間要求>では、母親と子どもの要求率の差に年齢段階による一定の傾向がみられず、「居間」「客間」では子どもの成長とともに母親の要求率との差が大きくなっている。また、「居間」については母親と子どもの要求の関連においても高校生段階でもっとも弱くなる傾向があり、専用空間使用の経験をもたないことが、子どもの現実的認知の発達を妨げる要因になると考えられる(図13、表6参照)。

<設備要求>では、母親と子どもの要求率の差は各年齢段階を通じて小さく、子どもの年齢によ



「小」は小学生を示す
「中」は中学生を示す
「高」は高校生を示す

図10. 子どもと母親の<空間拡大要求>の傾向

表 6. 住空間に対する母親の要求と子どもの要求との関連

空間	対象	全 体	小 学 生			中 学 生			高 校 生		
			全 体	男 子	女 子	全 体	男 子	女 子	全 体	男 子	女 子
			居 間	0.27**	0.31**	0.29**	0.36**	0.19*	0.09	0.26*	0.27**
空間 拡大 要求	客 間	0.23**	0.18*	0.11	0.35**	0.18	0.16	0.22	0.31**	0.13	0.55**
	台 所・ 食 事 室	0.32**	0.30**	0.23**	0.36**	0.32**	0.41**	0.28**	0.36**	0.37**	0.37**
	風 呂	0.25**	0.22**	0.03	0.40**	0.21**	0.12	0.27**	0.28**	0.24**	0.34**
	台 所	0.23**	0.34**	0.22*	0.42**	0.12	0.03	0.18*	0.17*	0.09	0.25**
	収納空間	0.15**	0.14**	0.00	0.26**	0.15*	0.18	0.13	0.17**	0.11	0.24**
	玄 関	0.27**	0.21**	0.12	0.30**	0.30**	0.28*	0.32**	0.26**	0.24*	0.28**
	庭	0.28**	0.16*	0.15	0.16	0.32**	0.18	0.41**	0.33**	0.40**	0.28**
家具 配置 要求	居 間	0.15**	0.07	0.03	0.10	0.12	0.11	0.11	0.23**	0.30**	0.14
	客 間	0.11*	-0.06	0.05	-0.13	0.11	-0.14	0.28*	0.27**	0.27*	0.26*
	台 所・ 食 事 室	0.23**	0.26**	0.27**	0.24**	0.01	-0.04	0.01	0.39**	0.46**	0.32**
専用 空間 要求	居 間	0.20*	0.25	0.04	0.40*	0.17	0.14	0.20	0.16	0.08	0.29
	客 間	0.12	0.04	0.02	0.07	0.24*	0.11	0.33*	0.18	0.33	0.00
	風 呂	0.30	0.30	—	0.39	0.10	0.25	—	1.00	—	—
	もう一ヶ所 便所増設	0.19**	0.19*	0.07	0.28**	0.23*	-0.10	0.47**	0.16	0.05	0.27*
	庭	0.10	0.28**	0.09	0.43**	-0.16	-0.10	-0.20	-0.09	0.40	-0.27
	書 齋・ 趣 味 室	0.15**	0.16*	0.22*	0.11	0.02	0.10	-0.03	0.23**	0.35**	0.10
設備 要求	家 事 室	0.20**	0.12	0.01	0.21*	0.17*	0.15	0.13	0.32**	0.43**	0.23
	台 所・ 家 事 室	0.31**	0.27**	0.19*	0.31**	0.24**	0.32**	0.19*	0.41**	0.37**	0.45**
	風 呂	0.60**	0.50**	0.38**	0.60**	0.65**	0.55**	0.72**	0.68**	0.77**	0.59**
	便 所	0.43**	0.51**	0.52**	0.51**	0.33**	0.16	0.43**	0.41**	0.42**	

— の所は、対象件数が少ないため、順位相関係数が抽出できないことを示す

** は、順位相関係数において、危険率 1%水準で有意性があることを示す

* は、順位相関係数において、危険率 5%水準で有意性があることを示す

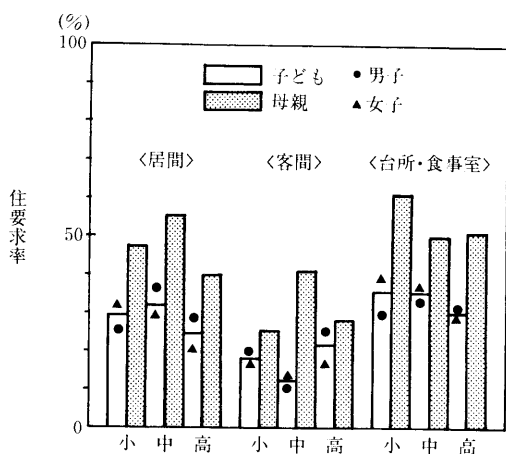


図 11. 子どもと母親の〈家具配置がえ要求〉の傾向

る差はほとんどみられない。また、母親と子どもの要求の関連も、小学生段階から高い傾向がみられる (図13、表 6 参照)。

最後に、男女別における要求の違いをみると、母親と子どもの要求の関連は、全体的に小学生段階においては女子の方が強く、中学生段階、高校生段階と順次男女による差がなくなる傾向が認められる。

4. 結 語

小・中・高校生の子どもの対象に、現在居住している住空間に対する子どもの評価と要求について、その判断の可否をとらえ、判断内容については母親と比較することにより、子どもの空間認識

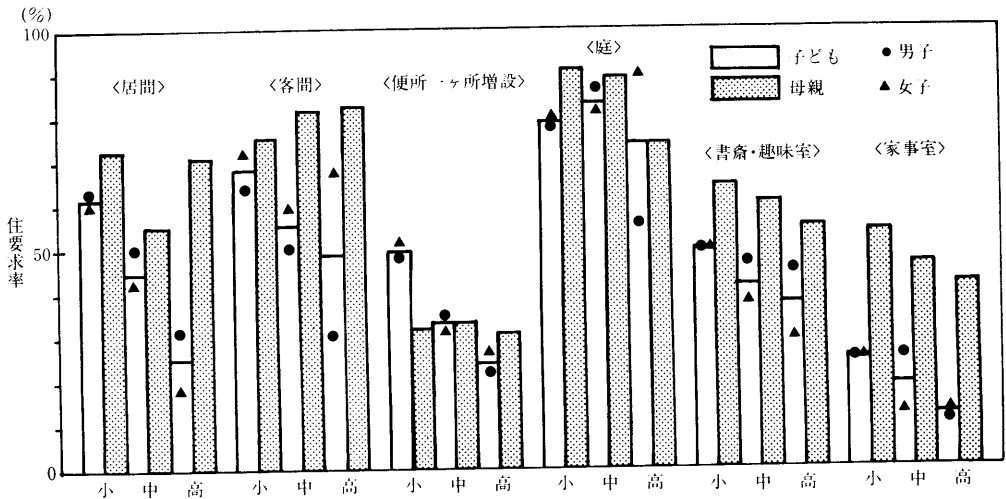


図 12. 子どもと母親の〈専用空間要求〉の傾向

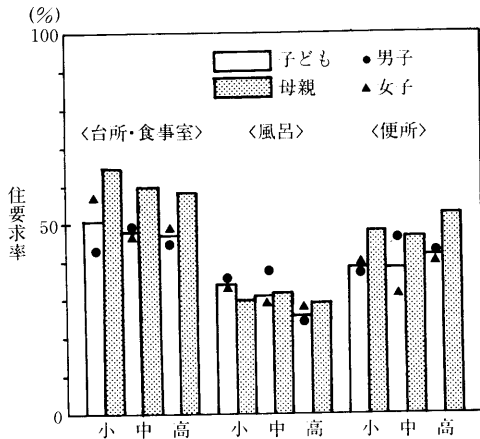


図 13. 子どもと母親の〈設備要求〉の傾向

や志向が子どもの成長とともにどのように変化・発達するのかについて検討した。その結果、以下に示す知見を得た。

- 1) 子どもの住評価についての分析より、子どもの空間認知は、住空間の実態的側面から発達して、空間の機能的側面や美的感覚に関する側面へと広がり、非日常的側面や社会的価値に関する側面については、もっとも困難であることがとらえられた。
- 2) 子どもの住要求についての分析より、子どもの空間認知は、子どもに身近な空間である子ども部屋、台所・食事室、風呂、便所等から発達し、

居間、客間へと理解が深まり、収納空間や家事室などの空間に対する認知へと発達することが認められた(ただし、居住経験をもたないことが、子どもの空間認知の発達を妨げると考えられるケースも認められた)。

3) 子どもは、自分が居住する住空間に対して、全体的に母親より良く評価しており、要求率も低い傾向があるが、高校生段階になると母親の評価や要求に近づく傾向が認められた。また、住空間に対する評価や要求についての判断の下し方をみると、高校生段階では下した判断が母親に近づくことから、より現実的確にとらえた判断になるという形で住空間認知の発達が現われると考えられる。

4) 性別によって、子どもの空間認知の発達に違いがあり、小学生段階では女子の空間認知の方が進んでおり、中学生、高校生段階へと順次認知の発達に、性別による差がなくなる傾向がみられた。また、家事労働に関する空間については女子の認知の方が発達しており、非日常的側面や社会的価値に関する側面では、男子の認知の方が発達していることが認められた。

5) 子どもの年齢段階別に空間認知の特徴をまとめると小学生段階においては、住宅内部の空間の広さや設備など空間の実態的側面についての認知が、自分に身近な空間を中心としてほぼ完成しているといえる。中学生段階では、地域施設に対する認知や自我の発達による子ども部屋や居間に対

する認知が小学生段階より進む。高校生段階になると、子どもにとってあまり身近でない収納空間や家事室にまで認知が広がり、家具配置や平面プランなど住宅全体についての空間の使い方や住生

活のしくみの理解が前提となる事項についての認知も発達し、部分的空間の個別的把握から、部分空間同士のつながりや部分空間の全体の中での位置づけなど全体的空間認知に発達するといえる。